

# AIがより進化する時代において 人間ならではの「真善美」を指標とする

東洋思想の「真善美」が、変化の激しい現代における経営の指針や生き方に役立つ思想として注目されている。

## 現代にも通じる東洋思想

少し前に、書店で、『真善美の追求』という本が目にとまった。著者は、最近、何かと好業績を収めていると聞くSBIホールディングスの会長兼社長である北尾吉孝氏。「経営者」と「真善美」がどのように関連するのか興味があり、購入してみた。

内容は、孔子や孟子をはじめとした、主に東洋の先賢達が遺した言葉の一節を引用しつつ、北尾氏が考える人間の生き方や企業運営に対する理念を簡潔にまとめたものだった。人間の根本的な在るべ

き姿を追求した哲学は、その時代背景を問わず、現代人の心にも深く染み入るものを感じた。

例えば、東洋思想では、自らを磨くためには、全ての責任は自分にあると考え、自己を変革し自己の徳性を高め、その徳をもって他の人を感化して行くことを目指すものであること。また、三綱五常の中の「仁」という徳目は、「忠（自身の内面の真心に対して誠実であること）」と「恕（自分のことのように他人を思いやる気持ち）」の二つで成り立っていることなど、印象深い教えが多かった。

ところで、真善美という言葉をも、筆者は勝手に宗教用語かと思っていたが、

元々は古代ギリシャの哲学者プラトンが示したもので、つまり哲学用語である。シンプルに解釈すると、「真」は、真理を追求する知性や、嘘偽りのないこと。「善」は、道徳的に正しい選択をすること。「美」は、美しく、調和していること。そして、この三点は、人間が生きる上で目指すべき理想の価値であるとも言われている。

元来、これは個人が追求すべきものと捉えられてきたはずだが、近年は、組織として追求すべき価値としても注目されている。京セラの稲盛和夫氏や、ユニクロの柳井正氏なども、真善美を企業における重要な理念として掲げている。

## 経営に「真善美」の観点を織り込む

企業活動では、常に大量の判断を迫られる。その際に、少し前まで重要視されて来たのは、考えの筋道を立てて論理的にまとめる「ロジカルシンキング」や、今までの常識をまず疑うところから始める「クリティカルシンキング」と呼ばれる思考方法だった。

それらの「〇〇シンキング」をする際



湯島聖堂の孔子像。孔子廟内には儒教の創始者である孔子が祀られている

には、様々なデータを指標とするが、そのデータは市場の動向や過去の実績など、言ってみれば、検討している事象の「外」にあるデータである。現在のように、変化のスピードが早く、不安定、不確実な時代において、外の（過去の）データを元に検討しても、課題解決や創造的な発想は生まれ難い。

一方、真善美の観点で、例えば、新たな製品の企画を検討する場合、誠実で正直なごまかしのないプランであるかどうか（真）、自分達だけでなく、関わる全ての人達にとって良いかどうか（善）、時代や人と調和し、ワクワクできるかどうか（美）といった、自らに問い掛けながら、「内」側との対話を重視することで、感性や主観を磨く方向性に向かわせることができる。その結果、経営は健全でブレることなく、好業績に繋がるといえるわけだ。

## AIにはない人間の「心」と向き合う

また、最近、現役世代や学生達の間で、哲学書が人気だという。その背景には、

得られる情報があまりに多過ぎて、一体何が正しいのかが分からなくなってしまうという若者が多い現状が予想される。

今後、AIがより以上進化し、数年後には、人間の知能を超える能力を持つと言われている。AIを搭載したロボットがどんどん社会を動かすようになって行くにつれて、私達はきつと「人間とは何か？」といった問いを抱く機会が増えて行くだろう。

それに対する答えは、他ならぬ自分自身で見出して行かなければいけないが、「真善美」という価値観は、その重要なヒントになると感じている。

自分自身に嘘や偽りがいないか、どのような行動をすれば、自分の心がすっきりとして、美しい状態でいられるか。その心をもって、周囲に対して思いやりの気持ちで接して行くことで、よい循環の中で、心はより満たされて行く。

良いことばかりでなく、あらゆる感情によって、常に変化し続ける心と向き合っていくことこそ、人間であるがゆえに味わえる貴重な経験だろう。

（立川秀明）